

まちづくりカフェ事業プロジェクト「Café With」活動報告書

プロジェクト代表 菅野 悠斗

指導教員 足立 基浩

活動の背景

ぶらくり丁商店街を含む、和歌山市の中心市街地において歩行者数の減少、空き店舗率の増加、地価の低下等、様々な点から衰退をみせる中、そうした衰退に歯止めをかけ、街中に回遊性と滞留性の創出を図るために 2005 年 10 月にぶらくり丁商店街の雑賀橋の上でオープンカフェを運営したことが Café With の始まりである。回遊性と滞留性の創出、つまりは、歩いて楽しいまちづくり、人が行き交うまちづくりに貢献することが Café With の 1 つの目的である。With という名前は、地域住民と「一緒に」という英語としての意味や、「和歌山いいところ発見」のローマ字表記(Wakayama Ii Toko Hakken)の頭文字に由来しており、カフェやイベント等を通して和歌山の魅力を発信し、一過性のイベントに終わらない日常的なにぎわいの創出に努めようとする活動の意図が含まれている。

今年度 Café With 実施日程

6 月 24 日(金) 6 月 25 日(土)

11 月 5 日(土) 11 月 6 日(日)

11 月 11 日(金) 11 月 12 日(土)

11 月 18 日(金) 11 月 19 日(土) 11 月 20 日(日)

11 月 25 日(金) 11 月 26 日(土)

12 月 2 日(金) 12 月 3 日(土) 12 月 4 日(日)

12 月 9 日(金) 12 月 10 日(土)

12 月 16 日(金) 12 月 17 日(土) 12 月 18 日(日)

12 月 19 日(月) 12 月 21 日(水) 12 月 22 日(木)

12 月 23 日(金) 12 月 24 日(土)

2 月 11 日(土) 泉南市防災ファミリーフェスティバルへの出張出店

以上、計 25 回実施

内、6月24日、6月25日はオープンカフェのみ営業

11月5日、11月12日、11月20日、11月26日はオープンカフェと店舗でのカフェを併せて実施。

当初オープンカフェを予定していた11月6日、11月19日、12月24日のオープンカフェは雨天のため中止となった。

その他の日程に関しては、ぶらくり丁商店街内での店舗で営業。



事業目的および達成のための取り組みと成果

- ① 回遊性の創出
- ② 中心市街地への関心人口の増加
- ③ 地産地消の推進
- ④ 商店主とのコミュニケーション
- ⑤ 空き店舗の再生

今年度のカフェの活動目的・活動指針として以上の5つを掲げた。

① 回遊性の創出

回遊性とは人の流れのことである。ここ数年は京橋でのオープンカフェ営業が主流であったが、今年度はぶらくり丁商店街内に活動拠点を置いたことに加えて、数回ではあるが京橋でのオープンカフェと店舗でのカフェとの2地点同時開催によって、2地点間の回遊性を高め、例年以上に多くの人々が商店街に足を運ぶきっかけが作りに貢献できた。11月26日の和歌山大学教育学部附属小学校および紀陽銀行との協働イベントでは、250人を越える集客を達成した。

②中心市街地への関心人口の増加

これはカフェへ来て頂いた人に対して、あるいはカフェとの協働を通して、中心市街地さらには中心市街地の活性化に興味を持った人を増加させるということである。イベントを1つ企画するにしても、より多くの方を巻き込みたいという想いがあり、今年度はアーティスト、商店街、企業、官公庁、教育機関等の個人・団体およそ50団体との協働を通じて1年間の活動に取り組んだ。

今年度は Café With を含めた和歌山市中心市街地の視察に、長浜市から市長をはじめ市役所やまちづくり会社の方々約25名や泉南市役所商工観光労働課の職員6名が来られるなど県外からも注目されるようになった。泉南市とはこの時の出会いがきっかけで、2月11日の泉南市での防災ファミリーフェスティバルへの出張出店を依頼され、県外で Café With のことをPRする機会もいただいた。

③地産地消の推進

今年度は地産地消という言葉を広く解釈し、例年のような和歌山産のものを使ったメニューの販売に加えて、市内の既存店舗の売上の向上という狙いを含め、カフェで扱うデザートは市内洋菓子店と協力する形で販売した。

フードメニューでは、和歌山の加太（磯ノ浦）でとれた新鮮なしらすを使ったしらす丼、北ぶらくり丁商店街のパン屋さんのパンを使ったトーストセットでは、台風12号で被災した日高川町の特産“へちまかぼちゃ”を使用したかぼちゃのスープをトーストに付けた。

デザートメニューについては、市内洋菓子店6店(レモネードカフェ、パナシェ、インターラーケン、プチタブチ、紫香庵)のご協力を受け、各店舗にて実際に販売しているスイーツを販売させていただいたり、和歌山産の柿を使用した Café With オリジナルのスイーツを作ってくださいましたお店もあった。



④店主とのコミュニケーション

今年度店舗でカフェを営業することを決めた大きな要因の1つである。ここ数年の間は、商店街の活性化ということを掲げていながらも活動の拠点はぶらくり丁商店街ではなく、商店街から少し外れた京橋プロムナードであった。このことは私自身の疑問でもあり、店主の方からも疑問に思われていた点であった。そこで、活動の拠点を移し、自分たち自身も商店街の一部を形成することが活性化や店主とのコミュニケーションを考える重要であると考えた。

そこで、ぶらくり丁商店街の活性化を考える上でそうした考えが重要であるという熱意を伝えることで、ぶらくり丁商店街の株式会社オカヘイ本店様のご厚意により、期間限定ではあるが、店舗を無償で貸し出ししていただけることとなった。そうして商店街に拠点を移したことで、店主とのコミュニケーションは必然と増え、お客様としてカフェに来てくださったり、実際にカフェで調理・販売していたコーヒーやデザートなどを安い値段で提供していただけるようになったりと店主の方々も非常に好意的に接して下さるようになった。

来年度以降も今年度のように徐々に商店街を巻き込んでいければと思う。

⑤空き店舗の再生

現在のぶらくり丁商店街の衰退の象徴とも言えるシャッター通りという代名詞。そうした住民からのイメージを払拭させたいと考えたのが店舗を持つに至った最大の理由である。ぶらくり丁商店街には良いお店や私自身もお気に入りのお店はある。しかしながら、シャッター通りというイメージが商店街から客足を遠ざけてしまっていると感じ、シャッター通りの再生が急務であると直感したのである。空き店舗が28%にも及び商店街のおよそ4分の1がシャッターを閉め活気がなくなってしまっているところに、学生という若い力が入ることで少しでもそのイメージを払拭できるのではないかと考えた。今年度は期間限定という形で株式会社オカヘイ本店様から店舗をお借りしたが、現在のところ、来年以降も店舗をお貸しして頂けるという話である。

感想・課題点

今年度に限らず、通年のCafé Withの活動の最も大きな課題として活動の継続性が挙げられる。活動の成果は当日のにぎわいの創出という点にとどまっているのが現状である。日常的なにぎわいと言えるためには、週末限定、期間限定のカフェではなく、1年間を通して活動を継続していく必要がある。

今年度の活動では、Café Withのメンバーは2回生から4回生まで約30名い

たが、当日の営業では、1人でカフェを回さなくてはならない日もあった。就職活動やバイト、クラブ活動等各々様々な理由もあるだろうが、例年の約2倍もの日程でカフェを実施したことがメンバーにとっての負担となっていたことも事実だろう。自身の成長、地域活性化のため、カフェ経営への憧れ等、参加へのきっかけは様々だが、活動の継続を考える上では、ボランティアベースでの長期間に渡る活動には限界があるのかもしれない。

そう考えると、動機付けとして人件費を支払うようにするためには、これまで以上に経営学、マーケティング等を学び、カフェやイベントの質を高め、利益を出していかなければならない。しかし、利益は、集客の表れでもあり、それだけ多くの人を呼び込んだという成果でもある。まちづくりとは何か、活性化とは何か、ということを考えることも重要なことだが、利益を追求し、自分たちが大学で学んだことを実践する場としてカフェを利用することも有意義なことである。

全面的に地域活性化ということを謳って活動していくのではなく、自分たちが活動をしたことによって街にある一定の効果が与えられたというような、結果としての地域活性化ということに挑戦してみることも1つの方向性ではないかと思う。

いずれにしても、活動を続ける以上は来年度は今年度以上により良い活動にしていかなければなりません。商店主とのコミュニケーションも増え、活動の拠点となる商店街の店舗を確保できている点で、来年度は今年度より活動の土台部分もしっかりしているので、是非とも今年度の活動で得たものを大いに活かした活動が展開されることを願うばかりである。

